

学生ができる国際貢献 —2006年度カンボジア研修報告—

岡本 亜紀*・岡 宏美・杉本 幸枝・岡本 直行

国際関係学

(2007年11月7日受理)

昨年の視察研修から1年が経過した。2007年1月、我々は、学生の国際的ボランティア活動の育成を目指す「新見公立短期大学カンボジア会」として、再びカンボジアを訪れた。内戦の爪跡が残る国を訪れ、人・生活・文化・医療に触れた学生は、何を感じ、学んだのだろうか。本稿では、学生の感想文をいくつか紹介すると共に、我々の「カンボジア会」が成し得る国際貢献のあり方を考える。

(キーワード) 国際貢献 開発途上国 ボランティア教育 大学生

はじめに

学生の国際的ボランティア活動の育成を目指す「新見公立短期大学カンボジア会」では、2007年1月5日から1月9日の期間においてカンボジア研修を実施した。岡山県に本部を置くNGO団体の協力のもと、学生は、NGO支援村を訪問し、開発途上国の生活環境に触れた。

今年度の研修は、開発途上国へ学生を引率した本学初の海外研修であった。4月から出発までの期間、学生メンバーと共に学習会や現地活動のための準備を重ねた。昨年度(2006年度)の視察研修¹⁾から1年が経過し、その成果の一つは、保健教室・レクリエーションという学生主体の現地活動を実施できたことである。しかし、これには現地の人々の参加協力を無くしては実現しなかったことであろう。

開発途上国や国際貢献を学ぶことを目的とした海外研修として、内戦の爪跡が残る国を訪れ、人・生活・文化・医療に触れた学生は、何を感じ、学んだのだろうか。本稿では、学生の感想文をいくつか紹介すると共に、「カンボジア会」が成し得る国際貢献のあり方を考える。

「新見短大カンボジア会」の紹介

1. カンボジア会の目的

人間を対象とした専門職に携わるための教養と感性を養う。

世界に目を向け、国際的視野で考える知識と態度を身につける。

2. 主な年間活動

1) 海外活動

孤児・地雷障害者・母子家庭・エイズ患者の支援プロジェクト見学および学生による保健教室・レクリエーションによる交流、現地医師による巡回診療の同行、ジャックフルーツ園開墾地での苗植えなど、岡山県に本部を設置するNGOの現地ボランティア活動の視察に加え、アンコール遺跡群見学やトンレサップ湖周辺地域の訪問などを行っている。

2) 学内活動

開発途上国やNGOなど国際協力に関する啓発・学習活動を目的とした定例ワークショップでのグループワーク、現地研修の報告会、新見市のカンボジア人留学生との茶話会など、また、ボランティア活動として衣類や文具などの支援物資の調達などを行っている。

2006年度研修

1. 研修期間

2007年1月5日～1月9日(現地滞在は4日間)

2. 研修先

カンボジア、シエムリアップ

3. 参加人数

学生 看護学科1年6名、2年2名

幼児教育学科1年2名、2年2名

教員 5名

*連絡先: 岡本亜紀 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

4. 研修内容

1) NGO施設訪問

NGO支援施設である「地雷障害者支援センター」と「第一自立村」を訪問した。「地雷障害者支援センター」とは、地雷障害者・HIV/エイズ感染者・孤児・母子家庭の人々に、住居を提供し経済的支援と教育支援を行っている施設である。「第一自立村」とは、「地雷障害者支援センター」からの自立者受け入れ施設である²⁾。大きく違うところは、「自立村」の人々は住居と土地のみ提供されるということであり、名前の通り、NGO支援から「自立」した生活を送っている。

学生は、現地スタッフから、NGOが行っている支援や人々の生活、カンボジア情勢などの話を聞いた。その後、学生による保健教室とレクリエーションを実施した。歌と手遊びの中での自己紹介から導入し、紙芝居と劇による「手洗いうがいについて」の保健教室、じゃんけんゲーム、「アブラハム」体操へと続いた。長縄とび、新聞紙での折り紙、日本語を教え合うなど、思い思いに、交流は時間の許す限り続いた。

2) 無医村無料巡回診療への同行

無医村での巡回診療は、医師（元軍医）である現地スタッフが、毎日一人で行っている。NGOの支援地域に限らず、舗装が行き届いていない無医村を広範囲に、毎日バイクで巡回している。今回学生が同行するため、マイクロバスが通行できる地域への巡回診療をお願いした。

学生は医師と共に、マラリア罹患者の住居を訪問した。

血圧や体温測定などの診察を見学している間に、周囲には、十数名の診察待ちの列が出来た。医師は、足の傷や目を診察したり、錠剤を手渡したりしていた。

3) ジャックフルーツ園開墾作業の手伝い

自給自足生活を手伝うため、鋤を使って広大な荒地に直径50cmほどの穴を掘り起こした。現地スタッフ、地域住民や子供達にやり方を教わりながら、苗を植え、添え木をして、井戸水をかけた。昨年の視察研修で植えた苗は、背丈ほどに成長していた。

5) 地雷博物館とキリング・フィールド見学

地雷博物館には、夥しい数の地雷が展示されている。学生は、地雷を見たり触れたりしながら、地雷設置から撤去作業までの過程や、地雷の威力などについての説明を聞いた。

カンボジア内戦がすべて終了したのは1998年である。1970年代、ポル＝ポトが指揮するクメール＝ルージュ（カンボジアの極左政治グループの総称）率いる解放勢力と政府軍の間では、長い間内戦が続いた。1975年4月17日、カンボジアは赤いクメールに政権を奪われ、これに続く4年間、市民一人ひとりの仕事、家族構成、財産が調査され、教育を受けた人は敵とみなされ、残虐な拷問を受けた。カンボジアのあちこちにあるキリング・フィールドでは、300万人以上の人々が惨殺された³⁾。見学したキリング・フィールド跡地の納骨堂はガラス張りになっており、そこには、処刑された人々の何千何百という人骨が



写真1 保健教室の様子



写真2 手遊び

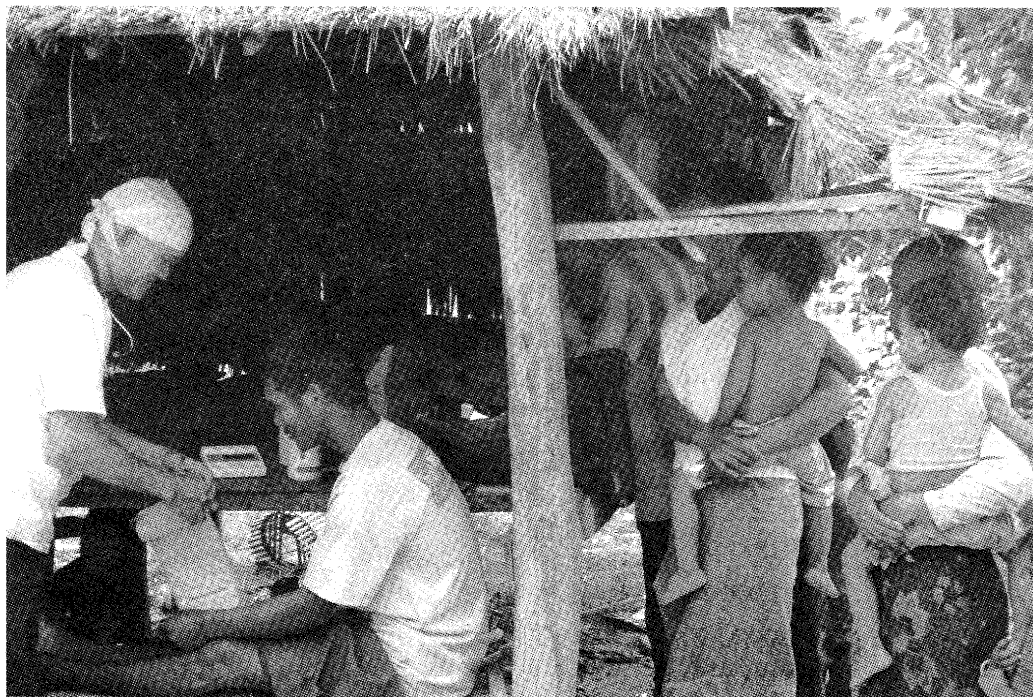


写真3 巡回診察の様子

納骨されていた。

6) 世界遺産・クメール織物研究所見学など(観光資源への訪問)

観光物産として有名なクメール織物の研究所では、若い女性達が子供をあやしながら美しい織物を丹念に織っていた。2階に観光客用の土産物店があり、クメール織物で出来た様々な作品が並んでいた。学生は、この研究所の織物は高値なのであまり購入していなかった。市民も日常的に利用するオールドマーケットにも行った。ここでたくさんのお土産を購入していたようである。

アンコール遺跡群では、学生は、遺跡をめぐりそこに刻まれた古代史を聞きながら、思い思いに写真撮影をしていた。トンレサップ湖では、臭いとハエの大群に我慢しながら、湖上生活を身近に触れた。それらの観光地では、大勢の観光客にまぎれ、物乞いをする人々にも出会った。

学生が感じたこと(学生の感想文から、気づきや学びの部分を抜粋)

学生A 私がカンボジア研修に参加した理由は、日本以外の国の子供がどういうところで、どのような生活をしているのかということが知りたかったからです。(中略) 遺跡を巡ったり、地雷について学んだり、ジャックフルーツを植えたりなど日本では経験できないことを体験したり、自

分の存在についてなどいろいろなことを考えさせられた研修だったと思います。これを機会にもっと国際問題などに興味を持ち、自分にできることなどを積極的に取り組んでいこうと思いました。

学生B カンボジアにいる期間には本当にあつという間に過ぎていって、最初は日本をととても恋しく思っていたが、帰国するときになると名残惜しさでいっぱいになった。貧しい生活を目の当たりにして、自分自身の幸せを改めて感じるとともに、自分の無力さというものに悔しさを覚えた。これから自分にできることを考えさせられ、世界に目を向けていきたいと思うようになった。そして、子供達の笑顔をずっと忘れないでいたいと思った。

学生C カンボジアの会で、留学生とお話をする機会もあり、また、インターネットで他のボランティアの活動を見たりして、私の中でカンボジアは、まだまだ発展途上の国なのだなあと感じていました。(中略) カンボジアには、物売りの子供が多く、学校に行っている子供達の姿も見ましたが、まだ、普及していない地域が多いのだなあと感じました。こうやって親のお金で、ごく普通に生活でき、大学にも行っている私達はとても幸せなのだなあと感じました。(中略) 私達



写真4 地雷博物館見学



写真5 キリング・フィールド見学



写真6 遺跡見学

にできる事は何だろうと考えました。まず、今回行った事で、見て来た現状、実際に沢山のの人に伝える事。そして、多くの人に興味を持ってもらい、人・物・お金の支援に携わってもらう事。私は、物を大切にしよう。ご飯は大切に残さず食べよう、募金をしよう和前から思っていました、より強く思うようになりました。発展途上国だけど、開発はどんどん進んでいる。その分貧富の差が大きくなっている事実を理解し、伝える事が大切だと思いました。

学生D 片足、両足のない方、目の見えない方、手のない方…地雷のむごさを感じた。地雷は死なないように作られているとは知っていたからこの説明を聞いたときはあまり驚かなかったけど、生きたまま苦しめていると考えると、耐えられないと思った。政府は自分自身の裕福な生活のために地雷除去に反対している。国がこんなであるのなら、絶対にカンボジアは生まれかわらない。(中略) 日本では最近、自殺の事件が取り上げられているが、カンボジアでは自殺なんて考えられないことだそうで、それは、先祖をととても大切にしているから。先祖にいただいた命を大切にしなければいけないと教えられて育っているからだそう。どれだけ貧しくてもどれだけしんどくても必死に生きようとしている人はたくさんいるのに、すぐ自分の命を犠牲にしてしまう。育った環境とか社会的背景が違えば、考え方も違ってくるのだろうから、日本人とカンボジア人を簡単には比べられないけど、それでも、先祖を、自分の命を大切にすることを、見習わなければいけないところだと思う。

学生E 今回はたくさんの方を訪れました。そのたびにたくさんの子供に出会いました。多くは物乞いでした。そしてその子達の目は輝いていて、澄んでいて、とても力があって綺麗でした。本当に一生懸命生きているのだなと思い、日本人には絶対真似できないものだなと思いました。ある村で遊んだ子ども達も同じ目をしていました。やはりこの子たちも服はきれいではありませんでしたが、その目と無限にある？と思う程の体力を見ると、私にはないものをたくさん持っていて羨ましいと思いました。今回の経験で私は海外派遣の看護師になりたいと思う気持ちがずっと強くなったと思います。海外に行ってもこの子たちのように一生懸命生きようとする人達の手助けをしたいです。そのために今は、今

まで以上に看護の勉強を行い、未来のために力をつけておきたいです。

学生F 日本にいと、学校に行くことや綺麗な水が好きなだけ使えること、病気になった時はいつでも病院で診てもらえること、それが自分の中で当たり前になっていたように思います。しかし、カンボジアでは学校に通えない子供達も多くいて、雨水を飲み水として使わざるを得ない人達もいます。それを実際カンボジアに行ってみて知ったことで、今まで私は自分の国のことや自分の周りのことしか見ていなかったように思いました。でも、これからは自分の国のことだけではなく視野を広く、日本以外の国にも目を向けていきたいと思いました。(中略) 今回カンボジアに行ったことはずっと忘れないと思います。またいつかカンボジアに行きたいです。

学生G 私達が自立村を去るとき、子供達は、バスまでついてきて手を振り見送ってくれました。服は汚れて穴が開き、靴も履いていなかったけれど、そこに暮らす子供達はみんな笑顔で素直で明るくて…とても幸せそうに見えました。そんな子供達の姿とはかけ離れたような子供の姿を、私達は別の日、目にしました。(中略) 身なりは自立村の子供達と同じようでしたが、その表情は全く違い、ほんの少しの笑みも見られませんでした。私は、そのように生活するために必死になっている子供達の姿を見て、切なくて胸が痛みました。(中略) 今回、カンボジアの実際を見て、貧富の差が激しく、貧しい人達がたくさんいること、そして支援の手がまだまだ必要だということを知りました。カンボジアから帰国した今、切に願うことは、子供達がみんな笑顔になってほしいということです。海外援助には以前から興味がありましたが、この研修に参加してより興味が深まりました。将来は、世界の、困難な生活を強いられている人達が、自立して笑顔で暮らせるような援助を、実際にしたいと思いました。

学生H 子供達からの日本の歌のプレゼントにはとても日本語が上手で驚いた。日本語を勉強している現地の人達も、始めて3ヶ月くらいで私達と普通に会話ができるようになっていて私も見習って頑張らないといけなさと感じさせられた。お話を聞いていると、本当にカンボジア政府は支援をしていないそうでした。政府は自分のポ

ケットにお金を入れるだけ。そんな話を聞くと私はどうしたらいいのかなととても考えました。一筋縄ではいかない問題なのだと思います、とても難しい複雑だと思った。(中略)ここへ着いたとき親に人身売買された子供達と出会いました。自分の子供達をそんな風に売っている親もいるそうです。そんな話を聞くとすごく寂しい気持ちになりました。(中略)私が出来ることが何なのか自分で考えました。それは、日本で自分がかんもかん勉強していくことではないかと思いました。カンボジアで私が学んだこと、感じたことを多くの人に伝えることではないかと思いました。カンボジアの問題の根本はすごく難しくてまだ今の私にはどうすることも出来ないけれど、これから少しずつ違う形で支援できることを考えていきたいです。

私たちができる国際貢献

「カンボジア会」の目的は、「人間を対象とした専門職に携わるための教養と感性を養う」、「世界に目を向け、国際的視野で考える知識と態度を身につける」ことである。学生に「カンボジア会」を紹介するとき、国際貢献とは何か、私たちにできることは何か、いつも問いかけている。その一方で、心中では、「カンボジア会」の活動は国際交流であって(もちろん国際交流も大切な国際協力であると思っている)、国際貢献には程遠いものだと感じていた。現地研修においても、国際的視野を養うために我我の方が国際貢献してもらっているように感じていた。しかし、学生の感想文を読んでいく中で、かつて、銃弾飛び交うコンボに、医療活動での調整員として派遣された看護師との会話を思い出した。「私たちが一生懸命生きること、自分自身を、自分の国を自慢出来るように。それが、復興を目指す人々の目指すお手本となれば、そ

れは国際貢献につながって行くんです」。そして、こう付け加えた。「日本の学生と交流を持った現地の人々が、日本に興味を持ち、日本の生活や文化を知りたい、日本に行ってみたくて思ってくれたら、そこから日本語を学びたいという気持ち(基礎教育の確立)、学校へ通いたいという気持ちや就労をしたいという気持ち(自己実現意識や生活水準の向上)、自分の力で日本に行ってみたくて(生活の質の向上)という気持ちになる。それは、一つの国際貢献の形ではないでしょうか。」

看護職として担う国際貢献を考えると、現地へ赴き医療活動をするを想起する。それが国際貢献であるなら、我々の「カンボジア会」は国際交流の域を超えないが、彼女は国際交流という形での自立支援=国際貢献を示唆してくれた。

「カンボジア会」では、2007年度も現地研修を計画している。今一度我々に何が出来るのかを振り返り、開発途上国との相互の関係の中で『私たちができる国際貢献』を学んでいきたい。

文献

- 1) 岡本亜紀、岡宏美、杉本幸枝他：学生の国際的ボランティア活動の育成を目指して－カンボジア研修報告－。新見公立短期大学紀要、27、187-197、2004
- 2) カンボジアの村を支援する会発行：カンボジアの村を支援する会会報(CVSG JAPAN)。11、2006.09.20
- 3) Aki Ra : My Story Vol.2. Landmine Museum & Information Centre, Cambodia, 2001
- 4) 川本隆史著：現代倫理学の冒険－社会理論のネットワーキングへ－。創文社、2003

International Contributions of Niimi College Students - Case Report of Cambodia in 2007 -

Okamoto.A , Oka.H , Sugimoto.Y , Okamoto.N

¹⁾Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

We, Cambodia Kai(group), visited Cambodia in 2007, with students of Niimi College, hoping they could understand International contributions for themselves. We reported here what they experienced and learned at Cambodia, then, we attempted to find out how we can carry out International Contributions in our way.